

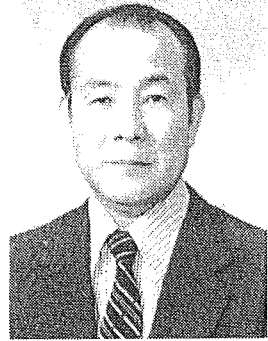
# 英 知 通 信



発行  
英知大学  
兵庫県尼崎市若王寺  
2-18-1 (〒661)  
TEL (06) 491-5083  
編集  
英知大学広報室

## 新任のあいさつ

英知大学後援会会長 中島 忠次



歴代の名会長のあとを受けて、このたび不肖私が英知大学後援会会長を拝命し、その任にあたることになりました。学校教育に無知な私がこの重責を果せるかどうか不安な気持ち一杯ですが、幸い副会長様はじめ熱意ある役員の方々のご協力を頂いて、微力ではありますが、誠意をもって任務を全うしたいと考えております。本学後援会は大学の教育方針を尊重して、その事業を援助し、併せて会員の親睦を図ることを目的として

います。昨今は国際的なシヨッキンな事件が次々と発生し、あらためてわが国が東西大国の峽間におかれた重要な国であり、私も日本人はこの厳しい国際情勢を認識すべきだと痛感させられます。このような情勢に対応して誇りをもって活躍できる人材の教育が必要です。さいわい本学では、国際性を身につけた人間形成を目標として、専門語学と幅広い教養の修得に最も適した教育が施されています。

後援会においても、学長先生はじめ先生方のご協力によって、秋の大学祭の際に催される親睦パーティーには、近年会員各位の参加が増し、年毎に発展しています。どうか役員各位、また会員の皆様方におかれては今後も大学並びに後援会にあたたかいご協力を下さるようお願い申し上げます。就任のご挨拶といたします。

## 開学記念特別講演並びに

### 第九回後援会親睦パーティー開催

開催

十一月三日の文化の日には絶好の秋日和に恵まれ、恒例の本学開学記念特別講演会並びに後援会主催第九回親睦パーティーが催された。このパーティーは後援会が毎年先生方を招待して昼食を共にしながら打ち解けて懇談し、大学の教育方針を理解すると共に、相互の親睦を深めるために開催されており、本年度九回目である。午前十時半から聖心女子学院教育相談員・カウんセラ―池谷充男氏の「今日のわかい生命を見極めて」

現代社会と青年期の諸問題」と題する講演があり、詳細な三枚の資料を配布され、現代の若い生命の諸問題を通して、生きることの意味を教育的な立場より分り易く説明して、約百六十名の聴衆者に深い感銘を与えた(別掲「講演要旨」参照)。

続いて十二時半過ぎから学生食堂で親睦パーティーが行われた。中島後援会長並びに傘本学長の挨拶のあと、会長の発声で乾杯し、会食、懇談に入った。最後に阪本副会長が閉会のことばを述べた。パーティーの参加者は父兄一二三名、先生三二名で、中には沖繩をはじめ、北九州・福岡・下関・千葉・静岡・福井・三重・鳥取等の遠方から参加された方もあり、

夫婦同伴の出席も三五組に上った。各科学年別に一四のグループに分かれ、グループ毎にその科学年数の二乃至三名の先生方を囲んで着席し、和やかな雰囲気の中に子女の教育や当日の講演の内容等について熱心な話し合いが続き、時のたつのも忘れる程であった。閉会后父兄の方々には学生の催し物や模擬店など大学祭の一時を学生と共に楽しんでおられた。(文責・後援会書記)

## 第九回

### 英知大学後援会総会開催



役員改選 議長が理事会より一任された次の案を発表した。

- 会長 中島 忠次(新任)
- 副会長 阪本美佐子(再任)
- 副会長 加藤 隆正(新任)
- 副会長 廣野 洋逸(新任)
- 監査 田金 正治(新任)

この案が満場一致で承認された。なお常任理事および理事は会則通り後日会長より委嘱し、発表する予定。

新旧会長のあいさつ 吉田会長並びに田中、芝谷両監査から離任の挨拶、続いて前掲の新役員が前に並び、中島新会長から就任の挨拶があった。

感謝状並びに記念品の贈呈 中島会長から吉田前会長、田中、芝谷両前監査、佐々木・岡田両常任理事、杉本理事に感謝状と記念品目録が贈呈され、会員一同から盛大な感謝の拍手が送られた。

学長挨拶 「ちようど今アメリカのローラス大学から副学長他一名が姉妹校の調印のため来学している。向こうの大学から態々来て調印式をするのは珍しいことで、話題になっている。どの国でも人間

去る五月二十八日(土)午後二時から本学H三〇一教室で第九回英知大学後援会総会が開催された。九十四名の出席申込みのうち二十名が欠席、七十四名が出席した。大多数は兵庫、大阪、京都、奈良、和歌山などの近府県からであったが、中にははるばる北九州市、広島県、千葉県、福井県、鳥取県等の遠方から来られた方もあった。会長挨拶のあと、会則第十二条により会長を議長として議事が進められた。昭和五十七年度決算報告 議長の名指により西田書記が別掲の決算書に基づいて収支の各項目を説明。後援会から大学への助成金については大部分がクラブハウス建築資金に、一部分が学生奨学金に当てられた旨説明された。監査報告 田中監査から帳簿書類等すべて完備されており、会計処理も適正に行われている旨報告があり、決算報告並びに監査報告共満場一致で承認された。昭和五十八年度予算案審議 西田書記が別掲の予算案について説明助成金について会長から補足説明があり、満場一致で承認された。

### 収入の部 昭和57年度後援会決算書 (自昭和57年4月1日 至昭和58年3月31日)

項 目	金 額	備 考
入 会 金	10,000,000	新1年4万円×250人
会 費	20,000,000	新1年8万円×250人
雑 収 入	919,826	銀行利子パーティ会費等
繰 越 金	1,330,053	昭和56年度よりの繰越金
収入合計	32,249,879	

### 支出の部

項 目	金 額	備 考
助 成 金	30,000,000	英知大学への助成金
事 業 費	1,227,680	総会茶話会親睦パーティ費等
事 務 費	29,300	通信印刷費等
会 議 費	128,210	会議費
慶 弔 費	14,360	会員死去の際の弔電料等
雑 費	0	
予 備 費	40,000	退任役員への記念品料
繰 越 金	810,329	昭和58年度への繰越金
支出合計	32,249,879	

### 収入の部 昭和58年度後援会予算書 (自昭和58年4月1日 至昭和59年3月31日)

項 目	金 額	備 考
入 会 金	10,400,000	新1年4万円×260人
会 費	20,960,000	新1年8万円×262人
雑 収 入	750,000	銀行利子親睦パーティ会費等
繰 越 金	810,329	昭和57年度よりの繰越金
収入合計	32,920,329	

### 支出の部

項 目	金 額	備 考
助 成 金	30,500,000	英知大学への助成金
事 業 費	1,600,000	総会茶話会親睦パーティ費等
事 務 費	100,000	通信印刷費等
会 議 費	200,000	会議費
慶 弔 費	100,000	会員死去の際の弔電料等
雑 費	120,329	
予 備 費	300,000	
支出合計	32,920,329	

共通の理想は真善美であり、その求め方が時代と国によって違うだけだ。国際交流はその違いを互いに学び合い、補い合つて、より豊かな人類の文化を礎いていくためにまずまず必要なことである。アメリカは今夏休みだがアメリカの大学生にとつて夏休みは遊ぶ期間ではない。学費は自分で出すのが当然だから、夏休みはアルバイトするし、サマースクールへ行く者はアルバイトができないので親から借用証を書いて借金をする者もある。そういう厳しい自覚が日本の大学生にも欲しい。教育で一番大切なことは親が子供に次の二つを与えておくことだ。これが具わつていれば、あとは学校と社会が引き受けて良い教育をしていくこ

とができる。その二つとは自主性即ち自分の分をわきまえ、自分のことは責任をもって果すという態度と忍耐力、即ち欠乏に耐える力だ。これを養うことが現状ではむずかしいところに日本の教育の一番の問題がある。

総会終了後、図書館一階集會室で恒例の懇親茶話会が催された。今年恒例の懇親茶話会が催された。今年恒例の懇親茶話会が催された。父兄は各学科別に分けられた九つのテーブルにそれぞれ一、二名の先生を囲んで着席し、飲食を共にしながら学生や大学についていろいろ歓談した。和やかなうちにも真剣さのただよう話し合ひは、閉会の挨拶後にもお続上る姿が見られ、皆名残り惜しげに散会していった。

昭和五十九年度  
入学試験日程

推薦入学  
出願期間 十一月十日～二十日  
試験日 十一月二十八日～三十日

試験科目  
現代国語、英語、面接

合格発表  
十二月十日、書面通知のみ

一般入試  
出願期間 一月二三日～二月六日  
試験日 二月十四日

試験科目  
国語(現代国語、古典Ⅰ、Ⅱ)  
(漢文を含まない)、外国語(英語B)、論文(二〇〇字以内)

合格発表  
二月二四日 書面通知および学内発表

要項請求は兵庫県尼崎市若王寺二一八八一英知大学入試事務室まで。  
(〒共九四〇円)

## 第二十回英知祭開催



爽やかな秋晴れの続いた十一月一日から三日間、本学キャンパスで「レボリューション」をテーマに第二十回英知祭が開催された。まず恒例の田吾作大行進の一行百二十名が色とりどりの奇抜な衣装でチャペル前に集合して午前九時に大阪・梅田へ向けて出発し、梅田界隈をパレードして廻つた。午後から学生会館ではE・S・Sによるブロードウェイミュージカルの「ザ・サウンド・オブミュージック」が公演された。一九三〇年代のオーストリアを舞台にトラップ一家が無事にナチスの探索をまぬがれて、アルプスを越えて自由の地スイスへ亡命するという、人間愛をテーマにしたミュージックドラマだが、音楽ファンにも十分に楽しめる美しいコーラスに満席の会場は感動の拍手につつまれた。二日目は九時から学生会館で西語研究部によるスペイン語劇「伯爵夫人のおどろき」の公園と邦楽演奏があった。チャペル前のステージではアトラクションをはじめ、本物は誰だ、ヤンキー英知など種々のゲームが行われ



たほか、学生会館横に設置されたメインステージでもミュージックフェスティバルが催され、学外からもいくつかのフォークバンドの参加を得て学内は終止賑わつた。正門から学生会館への沿道にはおでんやたこ焼き、スパゲッティなどの模擬店がぎっしり立ち並び、一方教室棟でも文化系クラブの展示や装飾をこらした模擬店が軒をならべて大声で客を呼び、また反戦映画二本も上映されて客席の感涙を誘つた。二日目にはチャペル前のステージでの自慢大会、ミス英知、フイリングカップルなどが催されたほか、午後はグラウンドで天理大学とアメリカンフットボールの試合が行われた。四時すぎからステージで行われたラブ・アタックゲームには他大学学生の参加もあつて盛り上がり、場内は手拍子と歓声につつまれた。学園祭三日目の文化の日には講堂で開学記念講演(要旨別掲)および後援会の父兄懇親会も催されたため、早朝から父兄の姿も多数見られた。こうして英知祭は盛況裡に三日間の祭典の幕を閉じた。

開学記念講演

「今日の若い生命を見凝めて」

—現代社会と青年期の諸問題—(要旨)

聖心女子学院教育相談員・カウンセラール

池谷 充男 氏



までモータリヤムで頑張ってきて自分分は会社の屋台骨をつくったという自信に満ちていたが、40代になって廻りで若い社員が次々にコンピュータを使いこなしていく姿を見て鬱状態となる。この鬱状態が中高年齢に増加している。

最近有名国立大学の出身者にある種の症状が見られ、問題点が指摘されている。エリート学生は両親と小中、高の恩師の期待のもとに約十年がかりでひたすらトップの大学を目指し、入学したことで一応の目的を達成したものの心のどこかで両親に反旗をひるがえしたいという心理が働いているから、なかなか卒業したがらず、留年を何度もくり返す。大学生になって初めて自我にめざめ、反抗期を迎えたタイプの学生のこのような足ぶみ状態を指して「モラトリアム」というが、今は大学生だけがモラトリアムではない時代が来ていて、社会人の30代ぐらいまでがモラトリアムだ。モラトリアムは支払猶予という意味の言葉だが、本格的なものに取り掛る前に足ぶみしていても許される足ぶみ状態の若者層を指している。しかし最近では40代のモラトリアムも出てきた。30代の中ば

マンガ本は今の学生にとつて、経済原論、経済学史等の専門書の隣りにマンガのブックナンバが並んでいるのが不自然な光景ではない程に一般化している。現代の若者はおとなしくてやさしさ一杯なのだが、内に秘めた挫折感ややるせなさをマンガの中で発散しているところがある。マンガ作家はただ描いているだけではなくて、読者である高校生や大学生からたえず意見を吸い上げては、どの辺で読者が感動してくれたかというのを感じとり、次の号に反映している。数年もの長い間連載が続くのだ。マンガ作家は常に時代を先取りしながら青年の心理を劇画やギャグマンガという形で描き、それは今や社会いっばいに広がっている。昔人気のあったノラクロマンガは身分社会の中で勤勉に頑張れば星が増えるという単純明快な論理があった。しかし今は一生懸命やったところで先は分らないという考えの中で政治経済、教育などを大人がきまじめにやっていると姿をひっくり返してみたいというギャグ、これが青年を異常

に喜ばせるのだ。青年には許されぬことをマンガの中で主人公が代りにやってくれるところにマンガの面白さがある。中学・高校生は校内暴力が盛んだ。最近ある高校で猟銃発砲事件があった。原因は特になくて、日頃の友人関係の中で徐々に不安な状況に落ち込んでゆき、被害妄想に陥り自分が作りあげた世界を守るために相手を消さなければ、というのが理由だった。銃砲が身近にあるという事実と、それを使えば簡単にやれるということを日常テレビ等でちゃんと見届けているという事実がセットされているからできる行為だ。校内暴力の問題について、世界の校内暴力の類型から云えば日本はアジアにおける唯一の重症国(対教師暴力)だが、世界の重症国はヨーロッパではイギリス、フィンランド。中国、器物破壊(クラス生徒間の暴力)はスエーデン、デンマークで、アメリカ合衆国は重症国、オセアニア地方は無症国(校内暴力がない国)。校内暴力のない国は中国、トルコ、アルゼンチン、チリだが、これらの国は政情不安な国で常にクーデターがあり軍人が権力で抑えているためだ。またスペイン、ポルトガル、パラグアイなどカトリックが生活の基盤に根をおろしている国にもない。このように校内暴力のない国には「知らされない、見せられない」という思想統制の国と、軍事的圧力によつて起らない国と、宗教的基盤がしっかり社会に根をおろしている国という三つのタイプがある。校内暴力では日本は重症国だが全国のカトリック校中、校内暴力のある学校は皆無だ。体罰はどうか。欧米諸国でもアメリカでも「体罰はいけない」という世論が確立しつつある。日本でも法的には許されていないものの「愛のムチ」という名のもとにやっちゃしま

う。臨床的立場から云えばよほど深い師弟関係が結ばれていないところだなされた体罰は、子供の心に何らかの心理的な傷を残す。寝食を共にしている親子の関係において父母が思わず手を振り上げるといふことから、これは自然の情の中であり得る。しかし教育者は社会契約の中で出来あがった師弟関係だ。親は学校と教師を信頼し、この信頼を前提として子供を学校に預ける。この間接的信頼のもとに通学する子供に教師が暴力を振るうといふことは、教師の側の弱さの露呈ではないかと云わざるを得ない。

暴力行為と並んで強迫行為(無意味な行為を機械的にくり返して自分の意志では止められない行為)も増加している。10才前後の子供は母親を依存の対象にしている。母から小言を言われ続けると自分の足元がゆらぐわけだから最終的に決断不能の状態となり、無意味な反復行動に出るようになって神経症の子供になる。子供は自律して自発があつて最後に自立するものだが、自律感が確立しないままに追いつめられた幼少年が多くなっている。自律神経失調とは自分自身が人間としてひとまとまりという実感が持てなくなる状態をいうが、この自律感が通常赤ちゃんと時代から2才半位までの間にしっかりと身につくものだ。2才半位からさまたまなしつけが始まるのはこのためだ。自律感のある子供にして初めて自分からやろうとする好奇心で行動し、失敗を重ねて親から自立することが出来る。強迫行動の原因ははつきりしているもの乳幼児期に強迫行動に入つた青年達はそのからきれいに抜け出ることが非常にむずかしい。相当あとまで性格の片寄りとして神経質な行動様式が尾をひくケースが多い。幼稚園児に自分で自分の体に傷をつけるケースもあるが、乳幼児期には言葉が充分ではないので母の笑顔や優しいまなざしや抱擁や頼ずりをもらわなければ生きられないのだ。乳幼児期の子供の保護とは子供の生命を守るための保護であり、これは子供に何かをしてやるというより、一体感の中で親の配慮を完全に届かせるということだ。母との皮膚接触によつて子供はこの母に繋がっているといふことで大人の世界に入れる基盤ができるのだ。ここを踏み外すとどんなに物質的精神的配慮があつても母親から切れてしまつて居る。

昭和35年頃に生れた若者(ニューヤング)は生れた時から満ち足りた日本社会の中で過保護と干渉を乳幼児期に受け、テレビを哺乳器として育ち、塾に通いつめて受験競争に繋がつての今日だから、小回りが利いて、大人が喜びそうなことを少しばかりやってくれるが、深く関わつて来ないのが特徴だ。ゼミ等でもよい意見を持つていながら失敗して恥をかくの恐れを発言しない過敏性格だ。ニューヤングの気質は周囲に浅く合わせながらフィーリングの中で自分の好みに合ったものを寄せ集めて、自分で飾つた可愛らしい部屋に住んで、親が支えてくれるという前提の中で傷つかないようにして、優しさを適度にふりまきながら生きていく。小さい時から傷つくことを知らずにやってきたので試行錯誤を体験させておかなければ、就職した後で上司からちよつと叱られただけで翌日から出勤拒否になる。

日本の小中高生は、育つ段階でいかに勉強ができるかといふことにおいてしか学校文化社会にのびのびと適応できないのだろうか。高等教育機関に行く年齢になると、まじめ

型で孤立的傾向のある者が国立大学に入っている。勉強が伸び悩み、味で少し反抗的だが、遊び型でエンジョイできなかつた生徒達が私立大学に行き、そこで伸び伸びと自分を取り戻している。国立大学には21%位は入学直後に精神治療の配慮が直ちに必要な学生が混っている。その点私立大学は非常に精神健康度が高い。私大のスタッフは日本社会で許されたモフトラム（この時期を、高等学校まで止むなく自分を抑えてきた青年期をここで自己快復するために許された期間として再評価してほしい。だから「留年」についても父兄は単にマイナスというイメージでとらなないでほしい。大学四年間のモラトリアムの中にもう一回モラトリアムという五年目があつてもよいではないか。その時学生達がここで何を考えようとしているかという対一の深い話し相手が必要だ。一対一で語り合うチャンスは青年期に

# 英南戦

— 伝統の対抗競技大会開催 —

今年で第十七回目を迎えた恒例の英南戦は去る十一月十九、二十日の両日、穏やかな好天に恵まれて名古屋の南山大学グラウンドで催された。本学からは学長、学生部長をはじめ教職員・学生総勢一二六名が燃えるような紅葉の中を三台のバスを連ねて名古屋へ向かった。南山大学ではリーマー学長、伊藤副学長ら教職員、学生たちの温かい歓迎を受けて開会式が行なわれ、アーチェリー、硬式庭球、卓球、バスケットボール（いずれも男女）、サッカー、バレーボ-

はどうしても必要だ。これが大学生の悩みかと思われるようなことでも、未完の行為を今ここで始めようとしているのだと理解して、付き合う手間をかけてほしい。これが臨床的立場にある者からの願いである。（講師・いけのぶお氏。文責・広報室）

## 国際交流委員会ニュース

三回生（四回生も可）を対象とした例年の春の「海外研修旅行」の募集を十月末で締め切ったが、その結果アメリカのローラス大学（姉妹校）へは三二名、スペインへは八名の応募があつた。引率者として、アメリカへは松本信愛先生（神学科、国際交流委員会委員長）と井田規文先生（英語英文学科）、スペインへは山口忠志先生（西語西文学科）が決定した。また、これと並行して募集した、英語英文学科の谷真嗣先生引率による「イギリス文学の旅」には九名の学生が応募した。

## 夏期公開神学講座

個人留学としては、一九八三年十月現在、アメリカへ一名、スペインへ二名行っており、来年以降の留学希望を申し出ている者が、現在七名おり、国際交流委員会の方で準備を進めている。

社会人でカトリック神学を学ばたい一般信徒や修道女を対象として毎年七月に本学で開催されている夏期神学講座は今年で第二十二回目を数えた。今年七月十九日から二十三日までの五日間、「聖年と霊性」を共通テーマとして開かれたが、のべ九六名が受講し、盛況裡に終了した。今年の神学講座の講師、テーマおよび日程は次の通りであった。

- 七月十九日（火）押田成人師（ドミニコ会高森修道院長）、「福音史家ヨハネの十字架のながめ」七月二十日（水）森一弘師（東京教区・関口教会）「アナムネシス（記念として）の霊性」七月二十一日（木）濱尾文郎司教「贖いの連帯性と私たちの応え」七月二十二日（金）井上洋治師（東京教区・東京カトリックセンター）「キリスト教の誕生」七月二十三日（土）井上英治教授（上智大学・人間学）「出合い、霊性そしてキリスト者」

ル（男子のみ・オープン戦）等合計十チームが参加して試合が展開された。本学チームは英南双方からの熱心な応援を受けて白熱の好試合を進めたが無念、総合成績は九対〇に終わった。試合後行われた交歓会は建学の精神を同じくする姉妹校同士の和気あいあい、さわやかな心暖まる一時で、一層の親睦が深められた。試合結果もさることながら、一年一度の対抗試合というこの得難い機会をとおして、両大学の教職員学生同士の交流が深められ、互いに学び合っていくところに、英南戦の計り知れない意義があるというのが、参加者全員の実感であった。

六月二十五日（土）ESSSの主催による第十六回 ORATORICAL CONTEST が本学学生会館で催された。神戸海星女子大など他大学からも参加者があつたが、本学西語西文学科の大内潔君と英語英文学科の笹川光晴君（いずれも一回生）がそれぞれ三位と四位に入賞した。毎年開かれるこの催しには本学では一回生にのみ出場のチャンスが与えられているが、審査員の一人であるバ-

ガー講師（英語英文学科）は感想を次のように語った。「English Grammar（英文法）、Composition（作文）、Structure（構造）、Manner（態度）等を審査したが、人に語りかけることは大へん勇気のあることであり、このような催しは英語力の高揚のために大変よいことだと思ふ。ESSSの今後の活動には大いに期待が持てる。次回のESSSの英語劇の発表会が待たれる。」

## 研究室だより

- 研究発表
- 西山俊彦教授（教養課程）『彼方からの規定』を夢みつつ
  - 「今年の私の研究計画」日本社会心理学会会報第96号 一九八三年五月
  - 共同研究
    - 生駒山系の宗教と社会についての5つの中間報告「概観」
    - 第34回関西社会学会大会 昭和58年6月11日 於京都大学
    - 「現実規定と集団形成」DSIGの事例を通して
    - 第56回日本社会学会大会 昭和58年10月10日 於埼玉大学
    - 井上博嗣教授（英語英文学科）は五月七日帝國女子大学で開かれた日本アメリカ文学会関西支部会において、「フランス・マッコーパーにおける自己実現」と題する研究発表を行った。
    - 芝垣哲夫講師（英語英文学科）は六月二十五日山形市の山形大学教育学部で開かれた国際日本文化研究会（JAJCS）の第一回年次大会で、「言語と文化」と題する研究発表を行い、多大の感銘を与えた。この研究会は国際的な視野から日本文化を研究するために昨年一月発足したもので、今回が初の年次大会であった。

密助助教（神学科）は月刊誌「本のひろば」（財団法人キリスト教文書センター発行）の中で、原恵教授（青山学院大学）と「洋楽伝来史海老澤有道著」をめぐって」と題してキリスト教の受容と教会音楽に関する対談書評を行った。

また、「礼拝と音楽」誌（日本基督教団出版局発行）No.28に「カトリックの典礼聖歌」——その特色と今後の課題——と題する小論文を発表した。

## 出版

- 松本信愛助教（神学科）は五月に中央出版社からD.L.ロワイヤ師（レデンプトル会社司祭）と共に「安楽死に関するカトリック信者の指針」を出版した。（四〇頁。三〇〇円）
  - 井上博嗣教授（英語英文学科）は六月にカトリック教会心のもしび運動YBU本部から小冊子「お父さんて……」（二〇頁）を出版した。
  - 芝垣哲夫講師（英語英文学科）は十月にNHK文化センターからLEFTS TALK IN ENGLISH AND HAVE FUN（一〇〇頁。一、〇〇〇円）を出版、昭和堂から三ツ星堅三助教（松陰女子学院大学）と共に ENGLISH READING AND COMPOSITION FOR COLLEGE STUDENTS（一〇六頁。八八〇円）を出版した。
  - 計報
    - G・デスカンフレール講師 母堂逝去 昭和五十八年六月三日
    - カシミロ・エルナンデス講師 母堂逝去 昭和五十八年八月二十日
    - 興津憲作教授 尊父逝去 昭和五十八年十月二日
- 謹んで哀悼の意を表します。